

平安後期の「ことなしぶ」とその派生語の検討 ―付・異文「ことならぶ」とその派生語―

堤 和博

はじめに

形容詞「ことなし」が上二段動詞化(『時代別国語大辞典

室町時代編二』¹⁾は四段活用とする)した「ことなしぶ」と、

「ことなしぶ」の連用形転成名詞、その転成名詞に「に」が付いた「ことなしびに」などの用例は、平安時代に入ってから現れるが、用例数はかなり少ない。しかし、それにしても意味の深部まで捉えようとすると多岐に亘る面があったりしてなかなか捉えづらく注意を要する語である。加えて、色々

不思議な要素も持っている。全部の用例について、明確に意味説明ができ、また、不思議な謎がすべて解けたわけでもないが、考察の結果と考え得る仮説をここにまとめてみる。

これらの語は、『時代別国語大辞典室町時代編二』で立項されていることから分かるように、後々まで見られるのであるが、考察の対象は筆者の専門である平安時代に限定することとする。さらに、平安時代の中でも、十・十一世紀の端境期頃迄の用例については、中古文学会²⁾で見解を述べており、いづれ別にまとめる機会を持つつもりでいるので、本稿では中

古文学会ではほとんど触れられなかった十・十一世紀の端境期以降の用例について考察する。それは、この時期以降から問題の語が用法・意味において変化を見せ始めるからでもある。なお、以後は、十・十一世紀の端境期以前を「平安前期」、以降を「平安後期」とする。ただし、もとより明確に線引きができるものではなく、十・十一世紀の端境期は、平安前期と平安後期が重なり合う時期でもある。

さて、『角川古語大辞典第二卷』⁽³⁾と『日本国語大辞典第二版第5巻』⁽⁴⁾における、動詞「ことなしぶ」と名詞「ことなしび」の語義説明をまず見ておく。このような語義説明が他の辞書でも概ねなされており、諸作品の諸注釈書でも同様の説明がなされていることが多い。

●『角川古語大辞典』

ことなしぶ 「何事もなかったようにふるまう。知らぬふりをする。また、それとなく断る。」
 ことなしび 「事のないふりをする。こと。」

●『日本国語大辞典第二版』

ことなしぶ 「何でもないふりをする。知らないふりをする。」
 ことなしび 「何でもない様子をする。なにげないふりをする。こと。」

一 平安前期の用例の意味

さて、本題の平安後期の用例に入る前に、後の論述においても勿論視野に入れておく必要がある。中古文学会で述べた平安前期の用例に対する私見を簡単に説明しておく。

平安前期の用例について、今代表的な二つの辞書で見た語義説明が必ずしも間違いだというわけではないのだが、特に「……様子をする」とか「……ふりをする」とか言って、言わば様子・態度に意義の重点を置いて解するのが気になるのである。諸作品の諸注釈書でも同じ傾向が見られる。実は、特に平安前期では「ことなしぶ」でも「ことなしびに」でも、

引用句乃至はそれに相応する語句を伴う場合がほとんどで（伴っていない場合は、省略されていると見なせる）、その点こそが重要だと私は考える。そして意味の重点がどこにあるかと言うと、ある問題を引き起こした責任のある当事者が、責任の回避をはかる発言等（これが引用句等で示される）を、するということにあると考えている。

一―1 『紫式部日記』

次の『紫式部日記』⁽⁵⁾の用例（『紫式部日記』からは後にも一箇所引用するので、**Ⅰ**・**Ⅱ**を付しておく）で、具体的に私の見解を説明しておく。なお、以下、引用に際しては、問題の語は太字にする。傍線等は私に付したものである。

Ⅰ 細殿の三の口に入りて臥したれば、小少将の君もおはして、なほ、かかる有様の憂きことを語らひつつ、すくみたる衣どもおしやり、厚ごえたる着かさねて、火取に火をかき入れて、身も冷えにけるものの、はしたなさを

いふに、侍従の宰相、左の宰相の中将、公信の中將など、つきつきに寄り来つつとぶらふも、いとなかなかなり。

今宵は無きものと思はれてやみなばやと思ふを、人に問ひ聞きたまへるなるべし。―いとあしたにまぬりはべら

む。今宵は耐へがたく、身もすくみてはべり―など、**こ**

とならひ⁽⁶⁾つつ、こなたの陣のかたより出づ。おのがじし

家路と急ぐも、何ばかりの里人ぞと思ひおくらる。

彰子が敦成親王を連れて土御門殿から宮中に戻った夜である。これより先、供奉の車列の中で、紫式部と馬の中將との間に乗車を巡る諍いがあった。もともと宮仕えに馴染めない紫式部であるから、久しぶりに宮中に戻ってますます憂鬱になっっているようだ。引用の冒頭の四行程は、そんな事情を背景とする。おまけに寒い。そこに「侍従の宰相」以下が続々とやって来た。ここで彼らは、自分たちの訪問のせいで紫式部が迷惑している（波線部から判断される）という問題を引き起こしてしまったのに気付いたのである。この際、その責任の回避をはかる方法の一つは、紫式部の迷惑を認めず（問

題の存在自体を認めず）長居することだろう。でもそんなこともできない。そこで彼らがとった方法は、紫式部が迷惑していることはおいておいて、「今晚は帰るけどそれは寒いからで明朝また訪問する」という主旨の発言（傍線部）をすることであった。これでは今宵の訪問は間違であったことにはならない。よって、自分たちの責任を認めないですむのである。かつ、長居もせずにすむ。というような判断を、この場合は筆者紫式部が下して、太字部分の表現となったのである。⁽⁷⁾

要するに、自分が引き起こした問題（ここでは、氣遣いのない訪問で紫式部に迷惑をかけてしまったこと）について、自分が責任を負わないですむ発言をするというようなところから、「ことなしぶ」また「ことなしびに」の意味の重点があると私は考えるのであり、平安前期の用例のほとんどがこの線で説明がつくのである。もっとも、その発言をする際の様子・態度はと言うと、「何事もなかったかのように」とかいふことになろうかと思うが、そのような様子・態度を表すのが「ことなしぶ」・「ことなしびに」の意味の元来の重点

ではないと考える。

1—2 平安後期に見られる平安前期と同様の用例

今『紫式部日記』で説明したような用例は、平安後期になつて姿を消してしまうわけではなく、残り続ける。平安前期の典型的な意味のさらなる説明もかねて、平安後期に見られる平安前期と同様の用例を先に指摘しておく。

まずは『忠度集』の詞書にある用例で、冷泉家時雨亭文庫本⁽⁸⁾により、濁点・句読点・鉤括弧も付けて引用する。

ともだちの「いまうでく」と申て、をともしはべ
らで、あくるあしたに「月みる人にいざなはれて、
心のほかなりしさま」など**ことなしび**つかはしたり
ける返ごとに

月を見てまたれぬ夜へのあらばこそたのめてこぬもわき
ておもはめ

「ことなしび」は傍線部の発言（手紙）を伴っていて、そ

これは来訪を約束して約束を破った言い訳になっているのが分かる。これを私なりの分析の仕方では、「すぐに行きま

す」と言っておいてすつぽかしたという自分が引き起こした問題について、「月見る人に誘われて心惹かれてぼつとなつてしまつて」という責任の回避をはかる発言をする、ということになる。そういうふうには、詞書筆者はみたのである。

次もやはり詞書中の用例で、『統詞花和歌集』巻六・冬に載る歌の詞書である。

冬（10）ころいとほげしくみゆる夜、人のもとよりことなし
 じ（11）びに、「こよひはまぬりくべきか」といひおこ

せて侍りければつかはしける（11） 馬内侍

ささのには霰降るよのさむけきにひとりはねなんものと

やは思ふ（303）（鈎括弧も引用者）

傍線部の馬内侍の恋人の発言（これも手紙であろう）を伴っているが、それは質問の形式をとりながら、波線部の状況説明からして、馬内侍の所へは行きたくないことを示唆しているものと、詞書筆者は受け取ったと解される。それで、こ

れも私なりに分析すれば、訪れないのは自分の愛情不足のせいだから自分に責任があると自覚している問題について、天候に責任転嫁するような責任を回避する発言（波線部）をしていると、詞書筆者は解していると読み取れるのである。

二 平安後期の用例の意味

さて、『紫式部日記』等の用例を引いて平安前期の用例の意味に関する私見を説明したが、『紫式部日記』と同時期頃から用法・意味が変化した用例が現れる。即ち、用法の面では、引用句（発言）を伴わない場合や、伴っても取り立てる必要のない場合も見えてき、また肝腎の意味の面では、『枕草子』の三つの用例などはいいかげんにと訳せるし、他には、まさしく先に見た辞書の語義説明のように、何気ないふうを装うと訳せばあたる場合も見えてくるのである。

二一 一 いいかげんに

では、『枕草子』の用例から見ていく。『枕草子』には「ことなしぶ」はないが、「ことなしびに」が三例見られ、これらが皆平安前期にはなかった用法・意味になっているのである。『枕草子』がなぜか変化の節目に立っているように思えるほどである。予め三例を、**I**、**II**、**III**を付して、列挙しておく。¹⁾

I 二月つごもりごろに、風いたう吹きて、空いみじう黒きに、雪すこしうち散りたるほど、黒戸に主殿司来て、

「かうて候ふ」と言へば、寄りたるに、「これ、公任の宰相殿の」とであるを見れば、懐紙に、

すこし春ある心地こそすれ

とあるは、げに今日のけしきに、いとようあひたる、これが本はいかでかつくべからむと思ひわづらひぬ。「誰か」と問へば、「それぞれ」と言ふ。みないとはづかしき中に、宰相の御いらへを、いかでか**事なしび**に言ひ出でむと、心一つに苦しきを、御前に御覽せさせむとすれど、上のおはしまして、御とのごもりたり。主殿司

は、「とくとくと」と言ふ。げにおそうさへあらむは、いと取り所なければ、「さはれ」とて、

空寒み花にまがへて散る雪に

と、わななくわななく書きて取らせて、いかに思ふらむと、わびし。これが事を聞かばやと思ふに、せしられたらば聞かじとおぼゆるを、「俊賢の宰相など」『なほ内侍に奏してなきむ』となむ定めたまひし」とばかりぞ、左兵衛督の中將におはせし、語りたまひし。

II 病は 胸。(中略) 八月ばかりに、白き単衣、なよらかなるに、袴よきほどにて、紫苑の衣の、いとあてやかなるをひきかけて、胸をいみじう病めば、友だちの女房など、数々来つとぶらひ、外の方にも、若やかなる君達あまた来て、「いといとほしきわざかな。例もかうやなやみたまふ」など、**事なしび**に言ふもあり。心かけたる人は、まことにいとほしと思ひ嘆きたるこそをかしけれ。

III 好き好きしくて人かず見る人の、夜はいづくにかあり

つらむ、晝に帰りて、やがて起きたる、ねぶたげなるけしきなれど、硯取り寄せて、墨こまやかに押し磨りて、**■なしびに**、筆にまかせてなどは**あらず**、心とどめて書くまひろげ姿もをかしう見ゆ。

以上三例から帰納される「事なしびに」の意味について結論から述べると、いいかげんにと訳せると考える。順次確認していく。

Iは、公任ほどの歌人から下の句が贈られてきたの⁽¹³⁾に対して上の句を付けなければならぬという問題を抱えたとも捉えられるが、それは自分が引き起こした問題ではないし、責任を回避する方向にも向いていない。むしろ何とか上の句を付けようとしている。その点が平安前期の用例とは大きく違う。そこで前後も含めた訳を考えると、「どうしていいかげんに上の句を言い出せようか」となると思うのである。

用法についても確認しておく、引用句（発言）を伴っておらず、この点も平安前期の用例とは相違している。

IIについても、「友だちの女房」も「若やかなる君達」も、

この事態において病人に対して何らかの問題を引き起こしたわけでもないし、よって責任を回避しようとしているわけでもない。いいかげんに見舞いの言葉を掛けていただけのことと解せる場面である。点線部の「心かけたる人」ならばけつして言わないようなことを言っているのを「事なしびに言ふ」と表現していると目される。

なお、この用例では形の上では平安前期によく見られた引用句（発言）を伴うのと同じになっている。しかし、今確認したように責任回避のための発言ではないことを勘案すると、引用句（発言）を伴っていることを、取り立てて問題にする必要はないと考える。

IIIも、後にくる点線部「あらず」で否定される点は相違するが、基本的には**I**・**II**の二例と同様に解せる。即ち、「好きしくて人かざ見る人」が「ねぶたげなる」時に手紙を書くとすれば、いいかげんに筆任せに書きそうだという前提のもと、なのに、いいかげんではなく、心を込めて書いていると言っているのである。

またこれも、引用句（発言）を伴っていない。

以上「事なしびに」の三例だけからであるが『枕草子』における問題の語について帰納すると、用法では、引用句（発言）を伴わないか伴っていてもそれは問題にならず、肝腎の意味では、問題を引き起こして責任を回避するという面は欠けていて、単にいいかげんなどと訳せばよいものになり、平安前期の例とは大きく違ってきているのである。

引き続き『枕草子』以外のいいかげんにと訳せそうな用例を追っていくと、次は『栄花物語』「わかみづ」にある。¹⁴

今年の宮の御まかなひは、内侍の仕うまつりたまへば、宮の大夫よりはじめてまつり、下部にいたるまでいそぎに思ひて、やむごとなげにしたり。かくて例は拝礼あるに、**ことなしびにて**殿ばらまかたまへば、女院の土御門殿におはしませば、あす行幸、行啓あるべければ、そのことの心あわたたしきなるべし。

引用句（発言）を伴わないのは明確だが、意味はややとらざらい。^{新編}日本古典文学全集は頭注で「おざなりなさま。公

卿たちの心は今日の臨時客にはないとする。」と注している。

つまり、「拝礼」がないので「殿ばら」が適当な態度で退出していく様子を表したものととっている。そうすると、いいかげんにと訳せる『枕草子』の用例の類例と見なせると思う。

一方『栄花物語全注釈五』¹⁵は、「何でもないような様子で。ここは、そうした事もなく。大饗の場合は拝礼も行われるが、今日は臨時客だからそれもないの意か。事実は大饗らしいが、ここは臨時客として書いているから。」とする。「ことなしびにて」の元の意は（「はじめに」で引いた辞書の説明のような）「何でもないような様子で」であるが、ここでは「臨時客では拝礼もなくて」の意になるということである。このような意味になるのなら、平安前期から通じて他には見られないものである。

結論を述べると、『栄花物語全注釈五』の解釈は同様の例が見出せない点が不安で、^{新編}日本古典文学全集に従って、いいかげんにの類例であると捉えておきたい。

また、「ことなしびにて」と「て」が加わっている点にも

注意が必要だ。この形は二―二で見ると『夜の寝覚』^{III}にもある形であるが、同じく二―二で取り上げる深川本『狭衣物語』^{III}の用例は「ことなしみに」になっている。平安後期になると、形の変化も起きている。

次は『夜の寝覚』巻五の用例である。『夜の寝覚』からも都合三例引用することになるので、^IⅠ^IⅡ^IⅢを振っておく。

Ⅰ ……入道殿、まづうち泣きたまひて、「今は老いの積もりの、つねのこととなりにてはべるを、聞きおどろき、訪ひ渡られたる人々はべるをだに、さらでもありぬべく、ことごとしく思ひたまふるに、かゝさへおはしまいたるかじこまり」をきこえたまふ。

いみじく心もたなくのみおほえたまへば、言少なにとなしびで、「幼き人の参りはべりにけるも、あひ訪ひはべらむ」とて、立ちてこなたにおはしまして、つつむべきこともなければ、ただ入りに入りたまへれば、小姫君、若君、女房などぞある。

太字部分には本文異同があり、^編新日本古典文学全集は、底

本とする松平文庫本では「ことならひ」となっているところを、国立国会図書館本によって「ことなしび」に校訂している。三巻本系統の前田家本は「ことならひ」である。¹⁷この本文異同の件は四で取り上げるとして、まずは、「ことならひ」にしても「ことなしび」にしても、文脈からして太字部分はどう解されるかを考えておくことにする。

内大臣（元の権中納言）が入道殿（元の太政大臣）の病氣見舞いに訪れた場面である。年老いた入道殿は、泣き出して「今は老いの積もりの……」とくどくど言い出す。それを内大臣はほっておくわけにもいかなのだが、内心は寝覚の君（入道殿の中君）が気掛かり（波線部）で早く会いに行きたい。そこで、「言少なに」入道殿の繰り言をやり過ごそうとするのを、太字部分は表現していると読み取れる。そして、その場を立ち去る理由として、寝覚の君に会いたいたとも言えないので、「幼き人……」（「幼き人」は、内大臣と入道殿の大君との間にできた小姫君）と付け加えたものと解される。

「ことなしび」にしても「ことならひ」にしても、私はこ

のように解するのだが、諸注の訳には錯誤があることを指摘しておきたい。例えば^{新編}日本古典文学全集はこの前後を、「内大臣は、寢覚の上のことばかりがひどく気掛かりに思われるので、言葉少なに何気ない様子で、「幼い人が参っておりましたが、子供にも会って行きましょう」と言われて」と訳している。つまり、「言少なにことなしびて」は、後の「とて」に掛かるとみているのである。太字部分が副詞ならそれだと思いが、動詞であるから、これで一つの動作を表しているとみるべきだろう。つまり、「いみじく……」と覚ゆ」「言少なにことなしび（ことならふ）」「幼き……」と言ふ」の三つが内大臣を主語として並んでいる（さらに二つ続いている）のである。また、「言少なにことなしびて（ことならひて）」が「幼き……」とて」を修飾するのなら、内大臣は入道の発言、特に発言の最後の点線部に全然応えないまま幼子に会いに行こうと言いつ出していることになる。そうではなく、入道の泣きながらのくだかしい発言、特に点線部を受けて二言三言「言少なにことなしびて（ことならひて）」か

ら、続けて「立ちてこなた」に行く理由を述べているとみることが自然である。さらには、そんなことまでして立ち去ろうとする心境を語り手が説明するのが波線部になる。

では、太字部分の意味はどうなるであろうか。入道が泣きながらくだくだ言うのに対して、いかげんに受け答えしてという意にとつて通るであろうと思うのである。

だとすると、先に見た『枕草子』の三例と『栄花物語』「わかみづ」の用例から判断して、太字部分は「ことなしび」であつた可能性が高いと言えよう。しかし、だからと言って「ことならひ」がいかげんにの意を含んでいる可能性もあるもので、断定はまだできない。いずれにせよ、本文異同の件は四でまともに取り上げるので、次の用例に移ることにする。

次は、『狭衣物語』巻三の用例¹⁶である。『狭衣物語』巻三からも都合三箇所引用するので、**I**、**II**、**III**を振っておく。

I 内裏にも、殿上人の教にては、左衛門権佐といふ人ぞ参らせたまひける。

まだ知らぬ暁露におきわびて八重立つ霧に惑ひぬる

かな

などやうに、**ことなしぶ**ならんかし⁽¹⁹⁾。院は、めでたき書きざまなどを御覽ずるに、思ひかけざりしわざかなと、なほ御胸つぶるべし。

故飛鳥井の君との間にできた娘が一品の宮のもとで養われていると知った狭衣が一品の宮の所に忍び入ったところ、一品の宮に懸想しているとの噂が立ち、心ならずも結婚する羽目に陥った。女二の宮を恋慕する狭衣にとって全然気乗りのしない結婚で、後朝の歌も贈る気が起こらず、女二の宮に歌を贈ったりしていた。とはいっても、引用の直前では父堀川の大殿から後朝の歌を贈らないことを咎める使いが何度も来るし、ついに後朝の歌を詠んで贈った場面である。

まず形の上では、「ならんかし」を伴う点に注意される⁽²⁰⁾。

肝腎の意味はというと、やはりいいかげんにと訳せるであろう。後朝の歌を贈る気がしない狭衣が、いいかげんに詠んだと語り手が推量しているのである。そう思って歌の詠みぶりを見ると、誠に陳腐である。ただし、これを見た「院」(一

品の宮の母女院)は感心している(点線部)のであるが。

次は、散逸物語『隠れ蓑』から『風葉和歌集』卷十三・恋三に採られた歌に付いた詞書中の用例である。

先に『隠れ蓑』の成立時期を押さえておく必要がある。そうすると、『無名草子』⁽²¹⁾での言及が重要になる。まず、女房が、「一手に言はるる『とりかへばや』には殊の外に押されて、今はいと見る人少なきものにてはべり。(中略)『今とりかへばや』とて、いといたきもの、今の世に出で来たるやうに、『今隠れ蓑』といふものをし出だす人のはべれかし。」と、『とりかへばや』と引き比べて取り沙汰する。この発言を受けて別の女房が、「げに、『源氏』よりはさきの物語ども、『うつほ』をはじめてあまた見てはべるこそ、皆いと見どころ少くはべれ。」と、今度は『源氏物語』以前の物語に言及する。よって、おそらく『とりかへばや』と同じ頃、あるいは同じ頃と言える程には近接していなくとも、『源氏物語』以降の平安後期の作だと考えて間違いはないであろう。さて、ではその用例を見ておこう。

「こころかはれるをとこのたちよりて、**ことなしびに**（ことなしびに）
ちぎることども侍りけるに

かくれみのの源中納言女

うきながら消えぬべきかな行末をちぎる心はいのちしら
ねば

これも、いいかげんにと訳して問題はないであろう。

二―2 何気ないふうを装う

続いて、平安前期の用例とはまた違った意味での問題、即ち自分が引き起こしてその責任を回避したいという問題ではない問題を懸案として抱えている人が、その懸案を隠して、何気ないふうを装うととれる用例を見ていくことにする。

最初は『夜の寢覚』巻一の用例である。

Ⅱ 「その後、影並べむの気色ありや。並べやしたまひし」

と問ひたまへば、「さまざま尋ね寄りさぶらはず。をりをり音なひはべるに、にくからず答へはれば、引き切

りがたくて、おのづから、さもはべるをりをり過ぐしは
べらざりしかども、なにかは、わざとも人も思ふべきこ
とならねば、絶えて久しくなりはべりぬ」と、我が心に
だに、ただ今他事なくしみがへり、あとより恋のせめく
る心地する人のことを、いとほざりに**ことなしびに**
る気色の心妬ながら、「いで、さのみはよにおぼえじを、
たださりげなく言ひなすならむ」とおぼゆれば、……

引用の冒頭一行は、権中納言が宮の中将に但馬守の娘との
関係について尋ねる発言である。権中納言は、昨晚九条で契
りを交わした女が、宮の中将が関係を持っていると乳母子の
行頼から聞かされた但馬守の娘だと誤認している。その女は
実は太政大臣の中君なのだが、それが判明するのは後になっ
てである。二行目中程からの発言は宮の中将の答えて、さら
にそれを聞いた権中納言の反応が続く。昨晚から権中納言は
但馬守の娘（実は太政大臣の中君）の美貌にぞっこんなので
あるが、この時も彼女のことを気掛かりで仕方ないのが点線
部から分かる。ところが宮の中将は「さまざま尋ね寄りさぶ

らはず……絶えて久しくなりはべりぬ」と言つて、但馬守の娘にはあまり惚れ込んではいない。そんな宮の中将の様子を、権中納言の目にどう映つたかを描写しているのが波線部である。権中納言は、宮の中将も自分と同様にあの絶世の美女のことが当然気掛かりであるはずだと思ひ込んでゐる。でも宮の中将はそんな態度をおくびにも出さないと権中納言は思う。そんなことは波線部の直後の心内語から窺えるであらう。

このような分析からすると、ここでの「ことなしぶ」の意味は、但馬守の娘への懸想という懸案を抱えている（はずの）人が、懸案を隠して、何気ないふうを装っている、と解せると思ふのである。要するに、「はじめに」で確認した辞書の語義説明が当て嵌まると言つてよいと思ふ。換言すれば、辞書の語義説明は、平安前期の用例に当て嵌めるには不十分なのだが、ここにきてびったりする用例が出てきたのである。なお、この用例では、引用句の直後の傍線部が挿入句で、「いとなほざりに」が「ことなしびたる」に掛かる修飾句と捉えられるから、引用句（発言）を伴う平安前期の用例と同

じ形になる。しかし、宮の中将本人は勿論、権中納言も、宮の中将が引き起こした問題の責任をこの発言で回避しようとしているとは思つていない。したがつて、先に見た『枕草子』の二つ目の用例と同様に、引用句（発言）を伴っていることを取り立てる必要はない。

続いては同じく『夜の寝覚』の巻五の用例になる。これは、二―1の『栄花物語』『わかみづ』と同様に「ことなしびにて」⁽²⁴⁾になっている。



あいなく、我があながちにつつみ、従ひたる心を、悔しくおぼしつづけて、答へもせず、ただつくづくとうちながめ出でて、いと引き隠し、**ことなしびにて**入りたまひなむとするを、……

先に引いた巻一より勿論ずつと後、波瀾万丈の曲折を経て、寝覚の上（太政大臣の中君）と内大臣（元の権中納言）は今夫婦関係にある。しかし、内大臣の言動・態度に寝覚の上が強い不満を抱き（最も不満なのは嫉妬心）、引用の冒頭では今まで強いて内大臣に順つてきたのを後悔している。そして

「ことなしびにて……」というのは、そんな気持ちを内大臣には悟られまいとしていることを表している。

すると、『枕草子』等のいいかげんにとは違い、『夜の寢覚』^{II}の動詞「ことなしび」に近い意味になっているのではないか。つまり、^{II}では、宮の中将が但馬守の娘への恋慕という懸案を隠して何気ないふうを装っている、権中納言の目に映っている状況を表していたが、この状況では、寢覚の上本人が右大臣への不満から気落ちしているのが言わば懸案にあたり、点線部でその懸案を意識的に隠していることをい、そして何気ないふうを装っている様子を表すのが太字部分だ。

用法としてはやはり引用句（発言）を伴わない。

続いては『狭衣物語』巻三で、狭衣が故飛鳥井の君との忘れ形見である女の子の袴着を巡ってやきもきする場面である。この子は現在、狭衣の妻である一品の宮の許に引き取られているわけだが（^Iの引用部参照）、一品の宮はこの子が狭衣の実子であると勘づいている。しかし、狭衣は勘づかれ

ているとは知らないで、実子であることを一品の宮には隠したまま何とか自分の手で袴着を執り行いたいと思っている。

^{II} 「などかは。わざとだに、院の御前に、女子は手触れさせたてまつらまほしけれ。かしこには、誰かは」と、

ことなしみに言ひなしたまひけるに、思し立ちたる事はかひなかるべきを、うちつけの便りならずとも、難かるべきならねど、今は我しも扱ふべきにもあらず、さぞ**ことなしみに**言ひなすとも、いかばかりもてなさまほしからんものを、ひき忍びたるも、なほあぢきなくやとは思せば、院にも内々の事は聞こえたまはねば、「かくまで、思ひ立ちぬとならば」とのたまはせて、御腰結に、自らの代りにとて、大殿に聞こえさせたまへれば、渡りたまひてぞ、着せたてまつりたまひける。

ここには、「ことなしびに」ではなく、二つの「ことなしみに」が出てくる。⁽⁵⁾⁽²⁾形の変化が見られる例である。

それはともかく、一つ目の用例は引用冒頭の狭衣の発言を「ことなしみに言ひな」と描写したものである。これの意

味を考えるには、狭衣発言の真意を把握しなければならぬが、そのためにはもっと細かい事情まで押さえなければならぬので省略するとして、諸注で分かりやすい説明がなされており、そちらを参照したい。例えば^{新編}日本古典文学全集は「実の娘である飛鳥井の姫君の袴着に関心が無いはずはないが、狭衣は努めて何気ないふりを装う。」と頭注で述べる。先に見た『夜の寢覚』のⅡ・Ⅲとの類似を探ると、「関心」（私の言い方では「懸案」にあたる）を隠して、まさしく「何気ないふりを装う」例と言える。

二つ目の用例に関しても^{新編}日本古典文学全集の頭注の続きを引くと、「しかし数行後に「さぞ事無しみに言ひなすとも、いかばかりもてなさまほしからんものを」とあるように、その内心は一品の宮に見透かされている。「思し立ちたる事は…なほあぢきなくやは」まで、宮の心内語。」と説明されている。一品の宮から見て、狭衣の態度は「関心」を隠して「何気ないふりを装」つていると見えるというのだ。そうすると、『夜の寢覚』Ⅱ、即ち、権中納言が宮の中将の態度を「こと

なしびたる気色」だと見なした場合と同じ構図である。ただ、『夜の寢覚』の場合はそれは権中納言の誤解であったのに対して、この一品の宮の忖度が見事に当たっている点は、大きな違いである。

二—3 降り掛かってきた問題を無難に切り抜ける

次は、言わば降り掛かってきた問題を無難に切り抜ける、とても解せばあたるような用例についてで、最初は『源氏物語』⁽²⁶⁾「総角」の用例を見る。

さまさま思ひたまふに、御文あり。例よりはうれしとおぼえたまふも、かつはあやし、秋のけしきも知らず顔に、青き枝の、片枝いと濃くもみぢたるを、

おなじ枝を分きてそめける山姫にいづれか深き色とはばや

さばかり恨みつる気色も、言少なにごとそぎて、おしつつみたまへるを、そこはかたなくもてなしてやみなむと

なめりと見たまふも、心騒ぎて見る。かしがましく、「御返り」と言へば、「聞こえたまへ」と譲らむもうたておぼえて、さすがに書きにくく思ひ乱れたまふ。

山姫の染むる心は分かねどもうつろふ方や深きなる

らん

ことなひびに書きたまへるが、をかしく見えければ、なほえ怨じはつまじくおぼゆ。

弁の手引きによって大君と中君の部屋に忍び入った薫であるが、大君には逃げられてしまい、中君と一晚を過ごしたが関係は結ばれなかった。その翌朝、薫から大君に歌が届けられ、大君が返歌する場面である。

引用一首目の歌は薫の歌だが、この歌に込められた薫の真意をまずは押さえておきたい。新編新日本古典文学全集は頭注

で「薫の心は、姫君たち以外の第三者には、具体的には分らないように詠まれている。」と注して、口語訳には「私はきよ姉妹よだのどちらに心をお寄せしたらよいのでしょうか」を付け加えている。周囲の女房の手前、一読するとこう解せる

ように詠まれているが、一首に込められた真意は新日本古典文学大系『源氏物語四』⁽²⁷⁾の脚注に指摘がある通り、「自分の心は大君思慕に染まっているとする。」というところにあると読める。

さて、点線部は、昨夜は薫から通れておきながら、今は薫からの手紙を「例よりはうれし」と思う大君の心の矛盾をつく。このように大君は「うれし」と思う一方で、周りの女房たちから「かしがましく、「御返り」と責め立てられていざ返歌する段となると窮してしまう。それを説明するのが波線部だ。まず、「聞こえたまへ」と言つて中君に返歌させると薫との間に後朝の贈答歌の成立、即ち、二人の間の関係の成立を認めたことになってまづい。かと言って自分が返歌しても自分との間に後朝の贈答が成り立ったことになる。また第一、薫の愛情を受け入れようとはしない大君だから、自分への愛情を示した薫の歌にどう答えればよいのか俄には分からないのだ。大君は「さすがに書きにくく思ひ乱れ」る。そうすると、さつきは「うれし」と思った大君にとつて、

薫からの贈歌はここにきて厄介な問題へと転化したと言える。本文にはないが、考えてみれば、ここで大君が窮してしまうのも、もとはと言えば昨晩薫が姉妹の部屋に無理に侵入したことに端を発する。このように分析すると、ここで返歌について苦慮しなければならぬのは、大君にとっては降り掛かつてきた問題とも言える。これを無難に切り抜けよう、と何とか自分で返歌を詠んで書き付けたのが引用二首目の歌であり、それが「ことなしびに書」いたとされているのである。ちなみに、薫の歌では「いづれか深き色とはばや」と言いながら、自分は大君に愛情を抱いていると強く示唆していたのだが、大君の返歌は、「いづれか」を額面通りに疑問ととり、あなたは中君への愛情を抱いていると答えたことになる。

次は『源氏物語』「手習」の用例である。

……いびきの人はいとく起きて、粥などむつかしきこ
 とどもをもてはやして、「御前に、とくきこしめせ」な
 ど寄り来て言へど、まかなひもいと心づきなく、うたて
 見知らぬ心地して、「なやましくなん」と、**ことなしび**

たまふを、強ひて言ふもいとこちなし。

浮舟が出家を遂げる直前である。頼みの綱の横川の僧都の妹尼が留守の中、僧都の母尼など老尼に囲まれて一晚を過ぎた浮舟は気味悪がっている。粥を勧められるも、やはり気味悪いので食べる気がしない。しかし、「気味悪いのでいりません」とも言えない。そこで、この降り掛かつてきた問題を無難に切り抜けようとしたのが、波線部の発言である。用法は、引用句（発言）を伴う平安前期のそれと同じだが、そこを取り立てる必要のない用例である。

続いては、『紫式部日記』の寛弘五年（一〇〇八）十一月一日の敦成親王誕生五十日の祝宴の中の記事で、古典の日の由来となった公任の紫式部に対する言動が描写される直前にある。

Ⅲ そのつぎの間の、東の柱もとに、右大将よりて、衣の

褌、袖ぐち、かぞへたまへるけしき、人よりことなり。

酔ひのまぎれをあなづりきこえ、また誰とかはなど思ひ
 はべりて、はかなきことどもいふに、いみじくざれいま

めく人よりも、げにいと恥づか^{ちが}しげにこそおはすべか
めりしか。さかづきの順のくるを、大將はおぢたまへど、
例のことならひの、千年万代にて過ぎぬ。

意味を考える前に本文について触れておく。太字にした部分
分が、五島美術館本『紫式部日記絵巻』⁽³⁰⁾では「ことなしひ」⁽³¹⁾
となっている。また、『紫式部日記』を写した『栄花物語』
「はつはな」⁽³²⁾のこの前後の本文は「盃のめぐり来るを、大
將は怖ぢたまへど、例のことなしびに千年万代にて過ぎぬ。」
となっている。

本文の件に関しては四で触れるので、「ことなしび」にし
ても「ことならひ」にしても、文脈からして太字部分がどう
解されるかを、ここでは考えておきたい。

すると、ここもやはり言わば降り掛かつてきた問題を無難
に切り抜けたと解せるのではないか。ただ、降り掛かつてき
た問題と言うのは、祝宴で盃が廻ってくる⁽³³⁾と歌を詠まなけれ
ばならないという習慣的なことなので、ちょっと当たらない
かもしれない。しかし、歌の不得手な「大將」(実資)の気

持ちを付度すると、紫式部には実資に降り掛かつてきた問題
だと思えたのである。そうすると、その降り掛かつてきた
(とも言えるような)問題をいつもの通り「千年万代」と唱
うことよって無難に切り抜けたと解されるのである。

二―4 平安後期の用例のまとめ

以上見てきた平安後期の用例の中には、異文を持つものが
幾つかあり、それをこの後の四で考察していくのだが、その
ためにも、ここで平安後期の用例についてまとめておきたい。
その際、着眼点の中心を、主として平安前期の用例からの変
化の様相に置くことにする。

平安後期には、平安前期の用例と同様の用例もある中、多
くの用例が平安前期とは用法・意味で変化を見せているので
あるが、肝腎の意味を中心にまとめると、それは三つ程あっ
たことになり、それぞれ検討しておく。

まず、何気ないふうを装う⁽³⁴⁾という意味から考えてみる。一

で触れた通り、平安前期の用例では、自分が引き起こした問題を、自分が責任を負わないように回避する発言をするところ、同時に意味の重点があると考えるのだが、同時に、その発言をする際の様子・態度はと言うと、何気ないふうを装う、ということになるであろう。すると、平安後期になって、何気ないふうを装うという様子・態度を表す方に重点が移った用例が現れてきたと見なせる。

次に、降り掛かつてきた問題を無難に切り抜けるというのはどうか。これについては、平安前期の自分が引き起こした責任のある問題という要素が降り掛かつてきた問題に変わり、責任を回避する発言をするという要素が問題を無難に切り抜けるに変化したと捉えられるのではない。ちなみに、無難に切り抜ける際の態度はと言うと、やはり何気ないふうを装うということになるから、その点は平安前期の用例と連続性がある。

最初に取り上げたいいかげんにはどうであろうか。平安前期における用例の意味の重点のうち、責任を回避するところ

に着目すれば、それはいかげんな態度だとも言えよう。つまり、平安前期の用例は、意識すれば要するところ、(…と)、言い訳するとか、(…と言つて)、責任転嫁するとかと訳せる場合が多いから、そのいかげんさが前面に出てきたのが『枕草子』等の用例だと理解できる。また、これもちなみに、いかげんな態度に出る際には、何気ないふうを装うという様子も含み持つ場合が多いであろうと考えられる。³⁾

平安前期から後期にかけての意味の変化はこのように説明できると思うのだが、そうすると、前期・後期を通じて、何気ないふうを装うという要素が、少なくとも含意としてはあったと言えよう。そこに着目すれば、本稿の冒頭で取り上げた諸辞書の語義説明も、やはり強ち間違いだとは言えなくなる。しかし、意味の重点に着目すれば、何気ないふうを装うという要素に重点が置かれるのは、平安後期以降だというのが、私の主張したいところで、したがって、特に平安前期の用例を見る時には注意を払うべきだと思ふのである。

三 平安後期の意味未詳の用例

本節では、どう意味をとればよいのか、これまでの考察からは分からない用例を挙げておく。

二つあるのだが、一つ目は『狭衣物語』のやはり巻三にある。狭衣が出家を執行すると決めた日の前日、恋慕する源氏の宮に出家の決意を告げる場面である。



「世を厭ひ離るる心は、ほど経はべりぬれど、誰もかく、戯れ言をさへ、忌々しきものに、思したまはずれば、心より外ならん命だに、かけ留めまほしう思ひつつ、憂き世を知らぬさまにて過ぐしはべるに、げにこそ、あまた年も積りはべりぬれ。昨日今日になりては、遂にいかにと、心細く思ひたまへらるるを、心より外にいかにしめされんとすらん。御前にこそ、今は限りの羽風も尋ねさせたまふまで侍れな。言の葉には留る命も侍りとかや。つらさは道のしるべにて、終の世の為は、あしうも侍らざりけり」など、**ことなしび**には言ひなしたまへど、

常よりもげにいかに思ひなりたまへるぞと見ゆる御けしきを、……

ここの「ことなしびに」も「何でもないふうには」（日本古典文学大系『狭衣物語』^{3,4}）などと訳す（私の訳では何気ないふうを装うになる）注釈書が目立つが、疑問だ。第一に、何気ないふうを装うという意味になるには、何か懸案の事柄を隠している状況であるはずだ。二―2で見た用例の場合、その状況は明確に読み取れた。ところがこの場合は、狭衣は懸案にあたる事柄（出家の決意）を隠しておらず、反対に吐露している。それと関連して第二に、出家の決意を吐露するのに、何気ないふうを装うのは不自然だと思う。もっとも日本古典文学大系は装うとまでは訳出していないので、出家の決意を「何でもないふうに」告げることがあるとしても、この場合は、波線部に描かれる源氏の宮の目に映った狭衣の様子とは齟齬を来すと思われる。それが、日本古典文学大系などの訳が不適当だと考える第三の理由である。

よって、この用例には何気ないふうを装うというような訳

は当て嵌まらず、ここにきて「ことなしびに」はまた意味に変化を萌し始めているのであろうか。どのような意味に変化しているかはとりづらいというか、色々にとれそうな気がするのであるが。ちなみに、新潮日本古典集成『狭衣物語下』⁽³⁵⁾は、「事なしびには言ひなしたまへど」に「努めて平静にお話しになるが」という訳をあてている。これならこの文脈に合致するが、このように訳せる類例は見当たらない。

意味のとれない二つ目の用例は、万寿二年（一〇二五）五月五日に阿波守藤原義忠主催・判者として任国阿波において催された『東宮学士阿波守義忠歌合』⁽³⁶⁾の判詞中にある。

左 盧橘芳風

吹く風かぜに花はな橘たちばなぞ匂におほふなるむかしの袖そでにあやまたれ

つつ(19)

右

常つねよりもことにもあるかな今日けふをまつ花はな橘たちばなの風かぜの

にほひは(20)

花はなたちばなのはおほかたさみだれの雨あめに匂におほひ、夕暮ゆふぐれ

の風かぜに薫かほりたるむかしの人ひといかがありけむ。よにたとふべきものなきに、左歌うたは石いその上かみふる言ことなれど、軒のきに生おふる草くさの事こと無なしびにや。右歌うたに今日けふをまつとあるは、あやめ草くさのためしにひくべしと思おもふにやあらむ。したの心こころは知らず、歌うたのおもてになむ。

太字部分を含む「軒のきに生おふる草くさの事こと無なしびにや」は、『平安朝歌合大成増訂』⁽³⁷⁾が「史的評価」の欄で「序文・判詞における序詞冠詞の濫用は、むしろ文章を晦渋なものとして」と指摘するのに例示している箇所でもあり、意味はとり難いが、その「史的評価」の記述も参考にして考えたい。

まず何よりここは、「史的評価」に指摘のある通り、『古今和歌六帖』⁽³⁷⁾第六章・「ことなしぐさ」の次の歌を踏まえていると思われるのに注意しなければならない。

君みてしほどのふるやのひさしにはあふことなしのくさ

ぞ生おひける(3860)

よって、「軒のきに生おふる草くさの」は「事無し」に掛かる序詞の役割を果たして実質の意味はなくて、「事無し」は勿論「こ

となし草」を掛け、「昔の人と最後に逢ってから久しく時間が経過してその間逢う事無し」を意味していると解せる。義忠が言いたいのは要するに、左歌は長らく逢う事がない昔の人を偲ぶ歌であるということであろう。

いずれにせよ、このあたりは「序詞冠詞の濫用」のために「晦渋な言い回しになっており、平安前期も含めた他の「ことなしび」の用例とは、一線を画しておいた方がよいようだ。

四 異文「ことならふ」とその派生語

用例が少ない割には意味が変遷を見せるなど、「ことなしぶ」・「ことなしびに」は不思議な言葉だと思う。不思議なことのもう一つに、なぜか平安前後期の端境期から、「ことなしぶ」には「ことならふ」、「ことなしび」には「ことならひ」、「ことなしびに」(の)「ことならひに」(の)「ことなしびに」(の)という異文が、各作品を通じて現れることがある。本節では異文がある箇所について検討する。意味・用法において変化

を見せる用例を持つ時期の作品で異文が生じているので、意味・用法の変化と異文の発生に何か繋がりがありそうにも思いうのだが、明確な説明はできないことを予めお断りしておく。特に意味において、ある傾向を見出せたに過ぎない。

なお、この異同は、発音の面では「ふ」乃至は「ひ」の清濁の相違も伴うが、それは「し」乃至は「ら」に付随するものであるから、突き詰めれば、「し」と「ら」の異同の問題ということになる。以下論述の便宜上、それぞれを「し」型・「ら」型と呼ぶこととする。

四—1 「ら」型の存在する所

まずは「ら」型のある所を確認しておく。既に言及したものでは、『紫式部日記』**I**の諸本間、『夜の寢覚』**I**の諸本間、『紫式部日記』**II**と五島美術館本『紫式部日記絵巻』・『荣花物語』「はつはな」間の異同がある。また、『狭衣物語』**I**、**II**の二つ、**III**ともに「ら」型があることは、注(19)

(25) (34) で指摘した通りである。その他にも「ら」型があるものを、本稿で取り上げた順に挙げておく。

最初は『忠度集』の詞書で、有吉保蔵A本が「ら」型になっている。⁽³⁸⁾ 次は『枕草子』**□**で、三卷本系統の古粹堂文庫蔵本、能因本系統の三条西家旧蔵本が「ら」型である。⁽³⁹⁾ 次は『源氏物語』「総角」で、河内本系統の七毫源氏、高松宮家本、国冬本と別本の横山本が「ら」型であり、別本の平瀬本は「ことならひに」⁽⁴¹⁾ となっている。⁽⁴²⁾

これらを見るに、『紫式部日記』を除けば、おおよそ有力な伝本では「し」型であると言えそうだ。その『紫式部日記』も、黒川本は最善本と言ってもせいぜい室町時代の姿を伝えているに過ぎないの対し、**□**の「ら」型の『紫式部日記絵巻』が鎌倉時代初期の筆写であることは重く受け止めなければならぬ。ちなみに、例えば『紫式部日記全注釈上巻』の処置を見ると、「諸本のプロパー本文には「ことならひの」となっているが、「し」(字母之)⁽⁴³⁾と「ら」(字母良)⁽⁴³⁾との字形相似による転化本文である。」(括弧内原文)と断定して、「こ

とならひの」を「ことなしびの」に校訂している。⁽⁴⁴⁾ 要は『紫式部日記全注釈上巻』は「ら」型の存在を認めていないように、他の作品でも有力伝本は「ら」型でない傾向があることからすれば、「ら」型は伝本の書写過程で誤写等によって派生したとも思える。しかし一方、幾つもの作品に渡って幾つもの「ら」型があるという事実からすると、皆が誤写されたものだと考えるのは慎重であるべきだとも思う。「ら」型についても少し検討を加えておきたいのである。

四—2 「ら」型と意味

「ら」型について検討を始めると、「ら」型がある所には、意味の上である傾向が見出せるのではないかと思えてきた。まず目に付いたのは、降り掛かってきた問題を無難に切り抜ける(以下、「降り掛かって…」と略する)と解せる三つの用例のうちの二つ、即ち『紫式部日記』**□**と『源氏物語』「総角」には、ともに「ら」型があることである。そう思っ

て、二―1―3の考察で他の訳があたると見なした用例の中に、降り掛かつて…とも解す余地のあるものはないかと再検討するに、次の三つの用例が当て嵌まると考えられた。

まず『枕草子』**I**は、公任から下の句が贈られてきたという問題が降り掛かつてきたのを何とか無難に切り抜けた場面だとも解せるのではないか。もつとも、これは所謂我褒めの段であり、公任が踏まえた白詩もきつちりと踏まえて清少納言は上の句を付けているし、引用の点線部にあるように源俊賢には褒められているし、無難にというのはあたらさないような気もする。しかし、波線部の「わななくわななく書きて取らせて、いかに思ふらむと、わびし」という表現などを見るに、何とか無難に上の句を付けたと、少なくとも表面的には言っているとも解せると思うのである。

次は『夜の寝覚』**I**である。病気の老入道が泣きながらくだくだ言うのに受け答えしなければならなくなったのは、一刻も早く寝覚の上に会いに行きたい内大臣にとつてはまさに降り掛かつてきた問題で、それを「言少なに」無難に切り抜

けたと解せるのではないか。

そして三つ目は『狭衣物語』**I**である。後朝の歌を贈らなければならぬのは常識だから、降り掛かつてきた問題というのとはちよつと違うような気もするが、狭衣にすれば、自ら播いた種とは言え、女二の宮を思慕しているのに一品の宮と結婚する羽目になり、詠む気も全然しないのに後朝の歌をどうしても贈らなければならぬ状況になり、厄介な問題が降り掛かつてきたと思つたとしても不思議ではない。そこで陳腐な歌を詠んだのだが、結果として一品の宮の母女院を喜ばせた(点線部)のは、無難に切り抜けたと言えよう。

『紫式部日記』**II**と『源氏物語』「総角」に併せて以上の三例⁽⁴⁾も勘案すると、降り掛かつて…と解せる用例とそう解する余地のある用例には「ら」型があるという傾向があるようだ。傾向というのは、『源氏物語』「手習」の用例には「ら」型が見出せないようでもとより厳密ではないからだ。

さて、降り掛かつて…という意味と「ら」型の有無の関連についてさらに考えるために、二―1―3で降り掛かつて…

意味	作品	型	「ら」 降り掛かっ て…と解 する余地
平安前期と同じ	紫式部日記 I	有り	×
平安前期と同じ	忠度集	有り	×
平安前期と同じ	続詞花和歌集	無し	×
平安前期と同じ	源氏物語・夕霧	有り	×
いいかげんに	枕草子 I	有り	○
いいかげんに	枕草子 II	無し	×
いいかげんに	枕草子 III	無し	×
いいかげんに	栄花物語	無し	×
いいかげんに	夜の寝覚 I	有り	○
いいかげんに	狭衣物語 I	有り	○
いいかげんに	隠れ蓑	無し	×
何気ないふうを装う	夜の寝覚 II	無し	×
何気ないふうを装う	夜の寝覚 III	×	×
何気ないふうを装う	狭衣物語 II 二例	有り	×
?	狭衣物語 III	有り	×※
?	義忠歌合	無し	×※

注※ 「意味」の欄は「？」としたが、降り掛かっ…と解する余地がないことは確かであると判断した。

と訳せると見なした用例を除いて、上の表を作成した。この表を見ながら述べていく。

今述べた傾向からして単純に考えると、三段目・四段目が、「有り」・「○」、「無し」・「×」の組み合わせになっていれば分かりよい。そこで気づくのは、「無し」と「×」の対応で、「無し」ならば必ず「×」となる（表には含めなかった降り掛かっ…と訳せる『源氏物語』『手習』は例外）。

しかし、逆は必ずしも真ならずで、「×」で「有り」となっているものがあり、少し考えてみたい。

見やすいものから順次いくと、まず、『狭衣物語』IIの二例とIIIである。『狭衣物語』は、Iも「有り」で、それも、特に内閣文庫本はすべて「ら」型になっている（注（19）（25）（34）参照）。内閣文庫本と「ら」型にも何か対応関係があるということであろうか。いずれにせよ、最善本とされる深川本に近接する内閣文庫本が、室町末から江戸初期の写しとは言え、すべて「ら」型になっているのには注意される。

次は『紫式部日記』Iだが、『紫式部日記』ではIIともど

も、黒川本において「ら」型になっている。黒川本も深川本と同様の傾向を持つと言えそうだ。

さらに、『源氏物語』『夕霧』（注（42）に引用）と『忠度集』も「X」・「有り」である。これらについては、如何とも言いがたいのであるが、前者の場合は、管見に入った限り、保坂本の傍書のみが「ら」型で、後者も有吉保蔵A本のみが「ら」型であるのが気に掛かる点である。

以上のことを総合すると、「ら」型の存在と降り掛かつて…、…という意味の間に、結びつきがあるとも思えてくる。そこで一つの可能性を提示しておきたい。それは、「ら」型は誤写等によって発生したのではなく、降り掛かつて…、…という意味を担った言葉として存在していたという可能性である。もともと「ら」型が言葉としてあったとしても、平安時代の諸作品の諸伝本の状況から見て無理で、鎌倉時代以降に生じたとみるのが穏当であろう。こう考えてよいのなら、黒川本『紫式部日記』や内閣文庫本『狭衣物語』、保坂本『源氏物語』、有吉保蔵A本『忠度集』は、伝来の過程で「ら」

型の意味がもつと広く捉えられていたとも考えられる。

勿論以上のように想定するにしても、鎌倉時代以降の文献の中に、「し」型と対立する形ではなく、確実に「ら」型であると見なせる用例を見出さなくてはならない。今回は「はじめに」でも述べた通り、考察の対象を筆者の専門とする平安時代に限ったので、鎌倉時代以降の「ら」型の確例の探索と、「し」型が鎌倉時代以降どう展開していくかの追跡は今後の課題として、稿を閉じたい。

【注】

(1) 1984年3月・三省堂。

(2) 中古文学会平成二四年度春季大会（5月27日・東洋大学白山キャンパス）における「町の小路の女の出現直後の検討―動詞「ことなし」の考察を端緒にして―」と題する研究発表。

(3) 1987年3月・角川書店。

(4) 2001年5月・小学館。

- (5) 『紫式部日記』の引用は、黒川本を底本とする新編日本古典文学全集『和泉式部日記紫式部日記更級日記讃岐典侍日記』（『紫式部日記』は中野幸一担当・1994年9月・小学館）による。ただし、太字部分は、笠間影印叢刊20『黒川本紫日記（上）』宮内庁書陵部蔵（秋山虔編・1974年5月・笠間書院）による。以下同じ。新編日本古典文学全集の見解には後に触れる。
- (6) 本稿では副題に示した通り、「ことならふ」も問題にするが、ここにそれがあることになる。この件は四で取り上げる。なお、群書類従本、足立稲直『紫式部日記解』（國文註釈全書『紫式部日記解土佐日記考証蜻蛉日記解環方丈記疏水抄酒説』（國學院大學出版部・1909年8月）による）、清水宣昭『紫式部日記釈』（覆刻日本古典全集『紫式部日記紫式部集枕草子清少納言家集』（現代思潮社・1983年10月）による）は太字部分が「ことなしひ」である。
- (7) 太字部分は、『紫式部日記』（池田亀鑑・1961年11月・至文堂）所収「校異紫式部日記」によると六本が「ことなくいひ」であるが、「ことなくいひ」と本文をたてる日本古典全書『紫式部日記』（玉井幸助・1952年6月・朝日新聞社）は、頭注で「ていのいいことをいつて。」との訳を付している。この訳などは、端的な意識としては、この部分に対する私の考えとよく合う。
- (8) 冷泉家時雨亭叢書第二十六卷『中世私家集二』（1995年12月・朝日新聞社）。同書解題（井上宗雄）は「時雨亭文庫本はもとより原本ではないが、上に述べたように、全体的にみてきわめてすぐれた本文であり、今後、異文の多い『忠度朝臣集』研究の礎石となる古写本であることは論を俟たないであろう。」と指摘する。
- (9) 以後、歌集からの引用は、『新編国歌大観』による。
- (10) 『統詞花和歌集の研究』（鈴木徳男・1987年8月・和泉書院）「本文篇」「校異」によると、太字部分に異同はない。
- (11) 『馬内侍集』159番に載る同歌の詞書は「一人のもとより、こよひはいきやすべきとあれば」である。また、同歌は

『千載和歌集』巻十五・恋五・957番にも採られているが、詞書は955番歌を受けて「題しらず」である。

(12) 『枕草子』の引用は、三巻本系統陽明文庫蔵本を底本とする^{新編}日本古典文学全集『枕草子』（松尾聰、永井和子・1997年11月・小学館）による。以下同じ。

(13) 諸注に指摘のあるように、公任の句は『白氏文集』巻十四「南秦雪」の一節を踏まえている。清少納言の付けた上の句もこれを踏まえて付けられた。

(14) 『栄花物語』「わかみづ」の引用は、梅沢本を底本とする^{新編}日本古典文学全集『栄花物語③』（山中裕、秋山虔、池田尚隆、福長進・1998年3月・小学館）による。同著の見解には後に触れる。なお、『栄花物語の研究校異篇下巻』（松村博司・1986年10月・風間書房）によると、太字部分に異同はない。

(15) 松村博司・1974年12月・角川書店。

(16) 『夜の寝覚』の引用は、五巻本系統松平文庫本を底本とする^{新編}日本古典文学全集『夜の寝覚』（鈴木一雄・1996

年9月・小学館）による。以下同じ。同著の見解には後に触れる。

(17) 『関根慶子教授退官記念寝覚物語対校・平安文学論集』（関根慶子教授退官記念会編・1975年9月・風間書房）による。

(18) 『狭衣物語』の引用は、深川本を底本とする^{新編}日本古典文学全集『狭衣物語②』（小町谷照彦、後藤祥子・2001年11月・小学館）による。ただし、太字部分は、私家版「古典聚英」1『狭衣物語下（深川本・為定本）』（吉田幸一編・1982年10月・古典文庫）による。以下同じ。^{新編}

日本古典文学全集の見解には後に触れる。

(19) 四で異文の問題を取り上げるが、その件に関して『狭衣物語』諸本の異同をみると、内閣文庫本「ことならひにそあらんかし」（『狭衣物語全注釈VI巻三（中）』（狭衣物語研究会編・2012年2月・おうふう）による）、蓮空本「事ならひならんかし」（『狭衣物語蓮空本巻三』（吉田幸一校・1955年7月・古典文庫）による）、永青文庫本「事

ならひなからんかし」(細川家永青文庫叢刊第十一卷『狭衣物語』(1984年6月・汲古書院)による)となっているのが注意される。

(20) 文法的には、名詞「ことなしび」+断定の助動詞「なり」の未然形+推量の助動詞「ん」の終止形+終助詞「かし」であろうが、このような句は他に見当たらない。

(21) 『無名草子』の引用は、新編日本古典文学全集『松浦宮物語無名草子』(『無名草子』は久保木秀夫担当・1999年5月・小学館)による。

(22) 『増訂校本風葉和歌集』(中野莊次、藤井隆・1970年1月・友山文庫)によると、太字部分に異同はない。

(23) ここで「懸案」というのは、用例によっては必ずしも適当ではなく、他の言葉の方がよい場合もあると思うのであるが、便宜上以後も「懸案」で統一して論じていく。

(24) 「ことなしびにて」は、名詞「ことなしび」+格助詞「にて」という語構成であろうか。

(25) 四で取り上げる本文異同に関して、多くの本が二例と

もに「ことなしひに」になっている中、内閣文庫本(注(19)参照)は二例ともに「ことならひに」、蓮空本(注(19)参照)は二つ目が「事ならひに」になっている。

(26) 『源氏物語』「総角」の引用は、大島本を底本とする新編日本古典文学全集『源氏物語⑤』(阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男・1997年7月・小学館)による。同著の見解には後に触れる。

(27) 柳井滋、室伏信助、大朝雄二、鈴木日出男、藤井貞和、今西祐一郎・1996年3月・岩波書店。

(28) 中古文学会(注(2)参照)では、この用例も平安前期の用例と同様に解せるものであると説明したが、ここにその考えを訂正する。なお、先に引いた『角川古語大辞典』は「それとなく断る」の用例としてこの用例を挙げるが、この用例を取り立てて「また、それとなく断る」と語義説明に付け加える必要はない。この見解も中古文学会で述べたものだが、これを改める必要ないと考える。

(29) 点線部は黒川本をはじめとする『紫式部日記』では欠

いており、五島美術館本『紫式部日記絵巻』（『日本の絵巻 9 紫式部日記絵詞』（小松茂美編・1987年12月・中央公論社）参照）から補われている。『紫式部日記全注釈上巻』（萩谷朴・1971年11月・角川書店）等で行われている通り、「げにいと恥づかしげに」の目移りによる誤脱であろう。同著の見解には後にも触れる。

(30) 注(29) 参照。

(31) 「ことならひの」または「ことなしびの」は、いずれにせよ、名詞＋連体格の格助詞「の」という語構成で、下の「千年万代」を修飾するのである。

(32) 『栄花物語』「はつはな」の引用は、梅沢本を底本とする^{新編}『日本古典文学全集』『栄花物語①』（山中裕、秋山

虔、池田尚隆、福長進・1995年8月・小学館）による。

(33) 新日本古典文学大系『枕草子』（渡辺実・1991年1月・岩波書店）は、Iの「事なしびに言ひ出でむ」の所に「何でもない風に言い出せようか。いいかげんな返事はできない、の意。」と脚注を付けている。これでは「何でも

ない風に」と「いいかげんな」を同義と捉えていることになる。私の分析は、そこを敢えて区別しての分析ということになる。

(34) 三谷榮一、關根慶子・1965年8月・岩波書店。なお、四で取り上げる異文の問題に関して本文異同を見ると、内閣文庫本（日本古典文学大系による）と飛鳥井雅章筆本（『狭衣物語諸本集成第六巻』（吉田幸一編・1998年9月・笠間書院）による）が「ことならひに」となっている

のが注意される。

(35) 鈴木一雄・1986年6月・新潮社。

(36) 引用は、『平安朝歌合大成^{増補}新訂二』（萩谷朴・1995年11月・同朋社出版）による。同著の見解には後に触れる。

(37) この歌は、『新勅撰和歌集』巻十五・恋五・945番と『奥入』・『河海抄』に、初句を「きみみずて」として載っている。参考のために『新勅撰和歌集全釈五』（神作光一、長谷川哲夫・2004年11月・風間書房）の【余釈】に記述される「表現の面」の説明を引くと、「まず「ほどの

経る」から「古屋」に言い掛けた。そして、「庇」に「久し」を響かせて、「逢ふ事無し」から「ことなしの草」に言い掛け、「古屋の庇」に「ことなし草」が生えることに寄せたのである。」となっている。

(38) 有吉保「忠盛集・忠度集について―伝本と本文の問題点―」(日本大学国文学会『語文』第59輯・1984年5月)

に載る翻刻による。なお、現在『忠度集』は、冷泉家時雨亭文庫本が最善本と目されるわけだが、冷泉家時雨亭叢書第二十六卷『中世私家集二』「解題」(注(8)参

照)でも『忠度朝臣集』は伝本が多く、(中略)その中でも比較的善本と思われる」と言われている書陵部蔵本(五〇一・一五八)では、「(前略)心のほかなりしさま(三字分空白)など、いひつかはしたりける返ことに」

となっている。『私家集大成』による)、肝腎の箇所を欠いている。一方、群書類従本は、「(前略)心の外なりしさまとことなしびげしたりける返事に」である。

(39) 『校本枕冊子上巻』(田中重太郎・1953年11月・古典文

庫)による。

(40) 『河内本源氏物語校異集成』(加藤洋介・2001年2月・風間書房)による。

(41) 『源氏物語大成卷三』(池田龜鑑・1956年1月・中央公論社)による。

(42) 『源氏物語』には「夕霧」にもう一例ある。雲居雁と夕霧が歌を交わす場面、中古文学会(注(2)参照)で平安前期の意味になるものとして取り上げた。

はかなき紙の端に、

「あはれをいかにしりてかなぐさめむあるや
悲しき亡きや悲しき

おほつかなきこそ心憂けれ」とあれば、ほほ笑みて、
さまさまもかく思ひよりのたまふ、似げなの亡き
がよそへや、と思す。いととく、**ことなしびに、**

「いづれとか分きてながめん消えかへる露も草
葉の上と見ぬ世を

おほかたにこそ悲しかりけれ」と書いたまへり。

この太字部分が別本の保坂本では「ことなしひち」になっている（『源氏物語別本集成第十卷』（おうふう・年4月）による）。

(43) 「校異紫式部日記」（注（7）参照）によると、多和文庫蔵本が「ことなしひの」（「ら」は朱）となっている。

(44) 既に注意しているが、二―1で取り上げた『夜の寢覚』**I**でも、新編日本古典文学全集は底本「ことならひ」を「ことなしび」に校訂していた。

(45) **I**も「ことなしび」に校訂している。

(46) この三例はともにいいかげんにと訳せると見なしたものである。これは偶然であろうか。またさらに付け加えると、『夜の寢覚』**I**を除けば、『源氏物語』「総角」と『紫式部日記』**II**も含めて、降り掛かってきた問題というのは、即ち和歌・連歌を詠まなければならぬけれども何らかの理由で詠みづらいことであるという共通性もある。何らかの理由と言うのは具体的には、『紫式部日

記』**II**は歌が不得手、『源氏物語』はどういう内容の歌を詠めばいいのか微妙、『枕草子』**I**は相手が公任で相應の出来栄えの句が求められる、『狭衣物語』**I**は詠む気が全然しないという理由である。